

埋もれた副作用の収集を

JASDIフォーラムで指摘

日本医薬品情報学会（JASDI）が19日に東京白金の北里大学で開いたフォーラムでは、医療現場や製薬企業に埋もれている副作用と疑われる情報を、いかに収集するかに関心が集まった。その課題に対し、病棟業務や医薬分業の進展で患者と接する機会が格段に増えた薬剤師に期待が寄せられた。また、患者から製薬企業などに直接寄せられた情報を重視する姿勢を求める意見も出た。

今回のフォーラムは、改正薬事法で市販後安全管理が重視されたことを受け、その要となる「良質な医薬品副作用情報の収集」をいかに行うかがテーマ。会場からは、「医療現場には報告されないまま埋もれている副作用と疑われる情報がある。これをどう収集し、

報告につなげていくのか」「外来の半数以上が院外処方という中で、製薬企業は患者と接する機会が格段に増えた薬局薬剤師からの情報収集に取り組み必要がある」「背景情報が不足している

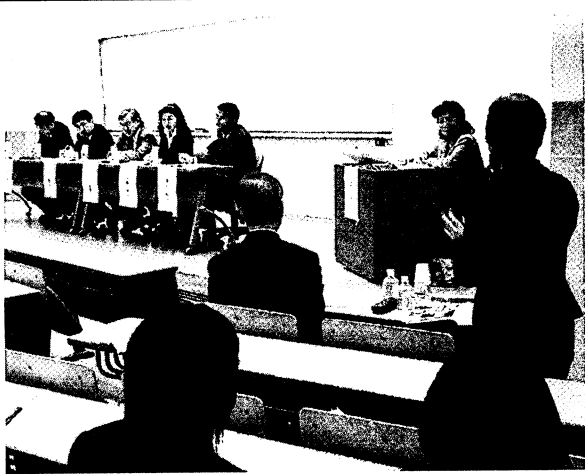
ても、処方医療機関からは『個人情報であり教えられない』と言われ対応に苦慮している」などの発言があった。それらに対し、講師の癌研究会有明病院薬剤部の濱

敏広氏は、過去の経験を踏まえ、「最初に副作用を疑うのは薬剤師である場合が多いが、未知かどうかわからない情報だと、医師は腰が引けてしまう場合が多く、薬剤師も医師の態度に引きずられがちなのは否めない」と説明。

しかし、一つの情報では意味が明確ではなくとも、同じような情報を他の医療機関も把握し、それらが報告・集積されることで、情報が意味を持つてくる可能性があるとし、薬剤師は副作用情報の報告へ前向きに取り組み必要があると指摘した。

同じく講師の別府宏国氏（新横浜ソウワクリニック院長）も濱氏に賛同。個人情報保護を楯に情報提供を拒む医療機関に対しては「匿名化はいくらでも可能なのに」と述べ、医療機関側を批判した。ただ、現場では「薬剤師は医師に遠慮している」とし奮起を求めた。

また、埋もれた情報を製薬企業や規制当局への報告につなげる名案はないとした上で、英国でSSRIに関する患者からの情報が集積され、製薬企業の安全対策を動かした例を紹介し、「患者からの情報を積極的に取り込む工夫が必要」と訴えた。



JASDIフォーラム